
斜め35度右後方からその声はした。

清水澄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

斜め35度右後方からその声はした。

【Nコード】

N9803Z

【作者名】

清水澄

【あらすじ】

過去の恋人の事が忘れられない主人公、そんな彼女にアプローチをするものの彼も彼女の忘れられない過去に振り回されて・・・惹かれあいながらも、二人の心はすれ違っていく・・・。

R15はたまに、コメディタッチで時々シリアス。そしてちょっぴり切ない恋愛ものを目指しています。

最後は、ハッピーエンドの予定・・・です。

斜め35度右後方からその声はした……。

おれ……お前のことがすきだ……。

モニターの音が響く夜のナースステーション。他の夜勤者はただいま巡視中だ。

私は、せん妄のおばあちゃんの見張りをするために一人詰め所に残っていた、

「ちーちゃん、たいくつですか？」

89歳のおばあちゃんは軽い肺炎と脱水でせん妄状態にあり夜になると家と病院の区別がつかなくなり、同室者の迷惑になるために深夜まで詰め所で過ごすことが多かった。

「他の人は巡視？」

声をかけられて目をやると、一人の医師がドーナツの箱を手に詰め所に入ってきて来るところだった。

「あれ？今日から夏休みじゃなかったけ？」

「気になる人がいたからちよつと顔を出したんだよ」

同期入職の彼は、ローテートで外の病院に出ていたのを先月帰ってきたばかり、頭もよく人柄もそれなりで、見かけもそれなり、しかも独身の31歳 若い看護婦の人気をさらっている。

なのになぜか、浮いたうわさのひとつもない。詰め所に差し入れを持ってくる暇があつたら、彼女でも作ればいいのに……、などというらないおせっかいを考えつつ、もってきてくれた差し入れをありがたく受け取り思った事を口に出してしまふ。

「夏休みだというのに、デートする相手もないなんてかわいそうにね。」

「……これからつくるからいいんだよ。」

そっぽを向きながらやや不機嫌に返事をする彼に苦笑を交えながら言った。

「まあ、おかげで差ししいれただいたし。ありがとうございました。」

「……現金だな、あいかわらず……」

円いテーブルの向かい側に腰掛けながら、電子カルテを立ち上げるしぐさをなんとなく見ていた。気になる人って、そんな重症の患者なんて今いたっけ？

考えていると、彼がカルテの画面を見ながら言った。

「今日は、定時で終わるの？」

思わず、ききかえした。

「?……なんで……?」

「終わったらラーメン食べに行かないか？」

「……いいけれど。今日の夜勤者に……誰か誘いたい子がいるの？」

私の問いかけにカルテに視線を落としたままで、軽く眉をしかめた後低い声で返事が返ってきた。

「お前一人なら、おごるぞ？」

わあ！ラッキー！！ 給料日前で今月は特に厳しかった。とつても助かる。

「いくいく!!どこまでも!!なんなら飲み付き合ってもいいよ!……て、どうしたの?なんか悩み事?相談? よし!お姉さんが聞いてあげよう!!」

お前のほうが年下だろう……。と苦笑いしながら彼は返事をする。そういえばローテート前はよく飲みいったよね。と、私もご機嫌に返事を返した。

……と、しょうもない会話で、うつかり目を話した際に、行動

監視中のおばあちゃんは外にでようとしていた。

「あー ちーちゃんここに居てくれるかな」

立ち上がるうとしてしている患者さんの、車椅子の前にひざまずき、したから顔を覗き込んで視線を合わせる。

「おなかすいたの？おかしもってこようか？それともお茶飲む？そういうえば、日置先生にもらったドーナツがあるからこっさりいただこうか？」

にっこり微笑みを返してくれるおばーちゃん笑顔に、悩殺されながら、お茶とどーなつを取りに行こうと立ち上がるうとしたそのとき……。

「おまえのことがすきだ……。」

その声はした……。斜め35度右後方から……。

「……………!?!……………」

……………なんか聞こえた?

……………いやいや幻聴?

……………空耳?

……………あつ! わかった! ちーちゃんに言ったのね。

すこし、不安におののきつつ声の主を首を回して、ゆっくりと見上げる……………。

奴は、少しの動揺も見せず、クールな笑顔で私の耳元でささやく。「放射線科側の出口の駐車場に車を止めている、ラーメン食いに行くよな? 逃げるなよ?」

啞然とする私からすばやく離れた彼

は、巡視を終えてドアから入ってきたスタッフに、差し入れ持ってきた、とドーナツの箱を指差して笑顔で去っていった。

……………ナニガオコツタンダ……………。

時刻は、午前1時。

私は速攻で申し送りを済まし、他のスタッフに挨拶をして、更衣室で急いで着替えた。

もちろん待ち合わせの場所など目指すわけもなく、指定された駐車場から一番遠い出口を目指して走った。

パートナー的な存在が不必要だと思っているわけではない、独身主義でもないが、気持ちが付いていかず、必要以上に親しくなるうとする相手は遠ざけてきた、今もその主義は変えるつもりはない、彼がどういづつもりか今ひとつ図りかねるが、危ない橋は渡らないに限る。

今はとりあえず逃げてなかったことにしてしまおう。
長い廊下を抜けて、ほっと一息ついて夜間ロックのかかっているドアにカードキーを通し外に出た、

「よしよし．．人影はない、そつと辺りを見回しつつ、タクシーを拾うために構内をでて大どろりに出ようと歩み始めたそのとき、後ろから腕をつかまれ引き戻された。

「．．．．！！うえ！！！！」

「．．．．相変わらずだな．．その色気も何もない驚き方やめろつて．．．．」

「．．．．なんでここにいるの？」

聞き覚えのあるその声に私は目を瞑り、顔を上げられず首をすくめながら問うた。

「．．．．それは．．．．俺のせりふじゃないのかな？ 君こそなんで待ち合わせた駐車場から一番遠い出口から出ているのかな？」

「．．．．ちよつと、道をまちがえた．．．．かな？」

言い訳をしながら首を回してそつと薄目を開けると．．．．そこには．．．

これ以上にないぐらい、素敵なお笑顔で微笑む彼がいた

「．．．．そして、明らかに怒っているであろう低い声で、彼はのたまわれた。

「．．．．ふん？．．．．この病院に6年も勤めて、寮にも入っていた君が、この病院の構内で迷うことがあるなんて．．．．ね？」
「．．．．誰か助けてください！！」

逃げ腰になっている私に 今度はこれ以上にないぐらい優しいまなざしを向けて彼は言った。

「貴重な時間を、こんなところでつかってもなあ．．．．」
独り言を言いながら、私の手を引っ張りつつ、構内の道路に止めてある車に向かった。

あつ．．懐かしい、まだこの車に乗ってたんだ。

私の視線にきずいたのか、はにかみながら言った。

「ちよつと目的があつて、車にまで資金が回せなかつたんだ」

研修医のころにバイトに行くのに必要だからと、中古車ショップで購入していた軽自動車、冗談で私がグリーン色がいいといったらその色を購入していた。彼はそのころ同期の中では一番私と気があつて、頼れる仲間だつた。ローテーションで疎遠になつていたが、大事な友人の一人だという事に变りはない。

そんな、友情を育んだ思い出のページを振り返つて良い気分である私の気持ちを察知せず。早く乗れよ！と、助手席側のドアを開けて彼は私を車の中に押し込もうとする。

ちよつと、いたいって！！そうだ、こいつは、大事な友人でもあるが、思い込んだら自分の道を周りも見ずに突っ走る迷惑極まりない奴でもあつた。

無理やり押し込まれしぶしぶと助手席に座つた私のシートベルトを締めて内側からドアロックまでご丁寧にかけてドアを閉めて、奴は急いで運転席に乗り込んだ。

「……ずいぶん親切にしてくれるのね……。」

訝しげな私に、涼しい顔で彼はのたもつた。

「当たり前だろう。自分が乗り込んでいる隙に逃げられたら、目も当てられない。どんだけ、この日を待つていたと思うんだ！」

「……?! ドンだけ親切なんだろうと思つたのは、逃げるときに時間がかかるようにするためですか？」

私が啞然としている間に、車はすべりだした。

「……ねえ？」

前を向いたまま、奴は返した。

「? なに? 帰るつて話は聞かないぞ？」

「……いや? そんなに、一人でラーメン食べるのいやだったの?」

「……はあ!？」

目を見開いて、ゆっくりと奴はこちらを見た。

ちよつと！運転中！！危ないって！！

大きなため息をつきながら、前を見て、まったく・・・とか、どうしたらいいんだ・・・。

とか、ぶつぶつ言っている。

そんな彼を見ながら私は考えた。友情以上のものがあるんだろうか？いや、以前から彼は読めない奴だった。いろんな女性がモーションかけていたが、意に介さずわが道を行っていた人だ。私の勘違いの可能性も高い。そんな勘違いで、彼にいやな思いをさせるのもどうかと思う。

「おまえ、あしたから5連休だったよな？」

・・・よく知ってますね。まあ隠してたわけでないけれども。

返事をせずに黙っていると、

「貴重な、連休だよな？」

・・・？ 何が言いたいんだろう？と、思わず顔を見ると、

にっこりと、悪魔の微笑を浮かべる横顔が見えた。・・・なんかいやなよかんがする・・・。

「時間はあるし、ゆっくり飲もうか？」

・・・それは、友人としての、純粋なお誘いですよ・・・ね？

気がつけば、なぜか彼のマンションにいた。夜中に安くでゆっくり飲めるところはここだろうと、押し切られた。

まあ、昔はよくよっぱらって皆と雑魚寝をしたから、初めてのお泊りではないけれど・・・、この状態で、この時間に、ここに来るのはかなり御遠慮したかった。

最近越してきたんだ・・・と言っつて案内してくれたそのマンションは、どう見ても、一人暮らし用でない。41dkで賃貸でなく、お買い上げだそうだ。

・・・そうですか、そりゃねあんたの給料だったら、買えるかもしれないわよね。

「・・・うわぁ〜 きれい!!」
リビングから、ベランダが見える。眼下に広がる、見事な夜景!! 思わず声をあげた。

「たそがれ時は、もっと、すごいぞ。」
いつのまにか隣に来た彼が軽く肩を抱いてささやく。
・・・何するんだ?・・・と 軽くにらみつけると、何事もなかったようにキッチンに向かいワインとビールどちらがいい?と涼しい顔で微笑まれた。

ここで、この状態でお酒を飲むのもまずい気がしたので、ノンアルコールのものがいいと伝える。

「・・・酒飲みのお前が、ノンアルコール?・・・何か予防線張ってるのか?俺ってそんなに信用されてないか?」
ちよつと傷ついた顔をして返された。やっぱり私の思い過ごしかな?それになんか有るなら、今まで一緒にいた時間の中でとつくにどうにか頑張っていただろう。

「口ゼある?」

もちろん、・・・と返事が返り、冷えたワインと、グラスと、おつまみを持ってローテーブルの上に置いてくれた。座ると夜景が見えないのが残念だが、椅子より床に座るほうが私は好きだ。彼が持ってきた大きなクッションにもたれくつろいでしまった。

・・・自分が怖い・・・。
隣に座ったら殴ってやろうと身構えるワタクシの期待にはずれて、彼は向かいに腰をおろした。

「このまま、子供が出来てもすめるね。」

空腹にワインなんぞをいただいでちよっという気分になった私が軽く口をたいた。

「その前に、嫁もらわないとね」

あさつてのほうを向きながら、まじめに、彼が答える。

「誰かいるんじゃないの？こんな、妻帯者用のマンション購入して？結婚フラグたってるじゃない？」

「・・・いるよ、手に入れたい人が・・・。」

真剣な顔をして、こちらを見た。

「・・・いやな空気が流れる・・・。思わず身をすくめた。

「・・・だったら、私なんかにかまってないで、その人さそえば？」

彼に好きな人がいたとは、初めて知った。もっとも3年も離れていたのだからきずかなくても仕方がない。そうか、好きな子がいるのかと少しショックを受けて、それでも幸せになって欲しいと、彼を見た。

「どんな子なの？」

私の問いに、下を向いてため息をつきながら彼はいった、

「・・・多分、まったく相手にされてないんだ、俺のことを、かぼちゃか芋だと思ってる。男としても認識してないと断言できる

ね
」

・・・その話を聞いてかわいそうになった。もともと私は彼は嫌いではない、むしろ友人としてとても大事に思っている。幸せになつて欲しい。そんな友人が、好きな人に異性として感じられていないなんてとても同情をしてしまう。そりやどこかでストレス発散もしたくなる気持ちもわかる。だが、わたしでは愚痴の相手ぐらいにしかねれない・・・。

「私相手に、女性心理を聞きだそうと思つても無理だと思つよ？だつて私は世間一般とかけ離れてる自信があるもの。」

・・・ほんとにね、・・・と溜息交じりに彼はつぶやいた。

どっちにしても、ストレスは私に向けられても困る。発散の対象に私が選ばれていることは、ちよつと不服だが、わらをもつかむ心理はわからないでもない。

顔はそんなに悪くないと思う。なまじつか当たり障りのない性格をしているのも、問題なんだろうか？世の中マニアックな好みの人が多いからな？

いやいや、実は やさしいんではなく単なるヘタレだつてことに先に気づかれたとか？優柔不断で決めきれない性格してるしなあ・・・それに、みよくなどこ細かいし・・・思い当たりは、いろいろあるよね・・・。

男として認識されていないって・・・。なんか、モーションはかけているんだろうか？でもそんな相手だと手も出しにくいだろう。

それだったら、まだ男として嫌われたほうがましかもしれない、男と認識されるだけ・・・。男と認識されていない相手に自分の性別を認識させる方法なんてひとつしかないと思うが、この一見周りを見ずに突き進むところもあるが、肝心なところでへたれてしまうこの男にそれを実行する勇気があるかどうか・・・。

などなど、彼が私の心の声に気づいたならば、本格的に傷つくだろうな・・・。

という内容のことを頭の中で考えつつ彼を見た。

わたしの、心の声に気づいたのか、彼はいった。

「・・・なんか、不本意なことを考えられてる気がする・・・。」

「いやいやいや、そんなことはないですよ？ほらほら、お姉さんが聞いてあげるから」

どンドン吐き出して頂戴よ。ほらここに座って!!」

「・・・だから、おまえは年下だろうって・・・。まあいいか、・・・よこすわっていいのか？」

ぺしぺしと、自分のとなりをたたく私を見ながら彼はいった。

「向かい合わせだとお酌しにくいなと思っていたのよ。今日は一晩中付き合っただけようじゃないの!」

のそり、と彼は移動した。・・・?いやでもそんなに密着しなくても・・・。確かに隣には言ったけれど・・・。いやいやいや、思う人に思われず人肌恋しいのかな・・・と解釈してあえて異論を唱えなかった。

・・・はい、浅はかでした。・・・

殆んど私を抱きかかえるような形で密着した彼の行動をあえて無視し、わたしは温かい視線で相談に乗った。

「でも、聞けば聞くほど、困った人だね。」

本当に、聞けば聞くほどあきれてしまう。

その人と彼の関係は6年にも及ぶという。私もまったくきずかなかつた。私たちが友情を育んでいたときに、彼は彼女に対する恋心を育んでいたらしい。でもいったい誰だろう?上手に隠したものだ。

もつと早く相談してくれれば良いのに。本当に友達がいのない人だ。
「・・・まあ、おれも、冷却期間をおこうかと思って連絡取らなかつた時期もあつたんだ。

周りの女性に気のあるそぶり見せた時期もあつたけれども、まったく反応なかつたし」

まあ飲んで、・・・とグラスにワインを注ぐ、話を聞くうちに、口ゼから始まり、白、赤、と3本目のフルボトルが空いた。

宅配の、ピザをつまみながら、私は涙目になっていった。

「しんちゃん。けなげだね。」

彼は、4本目出そうか？と聞いたが、私はかぶりを振った。

「いやいやいや、飲んでいる場合ではないって。どうにかして、その人を落とそうよ。でないと安心して飲んでられないよ!!」

こんだけ飲んで、飲んでる場合じゃないって・・・お前ドンだけ酔つてんの？・・・というため息交じりの声が聞こえた。

「どうしたら、俺の気持ちに気づいてくれる？」

覗き込むように、真剣な目で聞かれる。

うんうん、かわいそうにね、いい加減落としたいよね、切羽詰るよね。と考えながら、彼の真剣な瞳をぼつと見ていた。

・・・あれ？・・・何か違和感を感じる・・・。酔った頭で、違和感の正体を考える。

「無理やり、押し倒そうかと思つた時期もあつたけれど、そんなこととして傷つけるのも違うと思つて出来ない・・・」
そのせりふに思わず叫んだ。

「だめじゃない!!ヘタレ!!」

目を見開き、のけぞつてる彼に私は言い放つた!!少し・・・いや、かなり私は出来上がっていた・・・。

「6年だよ!!6年!!男として認識されていないんでしょう!!
!後はもう、自分が男だつて、無理から認識させるしかないじゃな

い。すきだつて言つても聞いてないんでしょう!? 後は押し倒すしかないよ!!!」

啞然としてこちらを見る彼に私はここぞとばかりに続けた。

「いつもいつもそう!!! 一見わが道行つてる様に見えるくせに肝心なところで引いてしまう!!! だからいつつもリーチかかっているのに、大事なものに限つて手に入れ損ねてるんじゃないの!? そういうのなんていうか知ってる? ヘタレつて言うんだよ!!! 一度くらい勇気出してチャレンジしなよ!!!」

あたつて碎けてしまえ!!! と叫んだ私を見つめて、彼は碎けるは余計だ!と言つた。

そしてしばらく私を見つめていた。どのくらい時間がたったただだろう。。。見開いていた目を閉じて、こめかみに手を当てて、ため息をつきながら彼はいった。

「。。。そうだな、すきだつて伝えても幻聴扱いだもんな? あのシユチュエーションで、何でおれが ちーちゃんに、告白せんといかんのだ?」

横にいた彼との距離が縮まった。腕をつかまれた。

「。。。おまえ。。。これだけ言つても、自分に心当たりはないのか?」

酔いが一瞬でさめた。今私、何か非常にまずい事をいった気がする。。。

「。。。え〜つと? 宴もたけなわでございしますが、わたくし、長居をしているみたいなので。。。そろそろおいとまを。。。」

立ち上がるうとした私を逃がすものかと片手が抱きしめ、あいた

片手がゆっくりと私の顎を捉える。

「5連休だったよな？奇遇だな？俺もだよ」

よかったですわね、と逃げようとしてみた。・・・でも逃げられない。やな汗がでる。

「お前言ったよな、後は押し倒すしかないって・・・。」

いやいやいや言ったよな、言わないよな・・・それはワタクシ除外ということをお願いしたいのですが・・・？。

「お前の助言どうり、肝心のところで引いてしまっへタレは卒業する事にするよ」

彼は私の頬をなでながら続けた。

「ゆっくりと、俺の性別が、雄だってこと認識してもらっよ・・・それから、いろいろ相談することもあるしな・・・。」

いやいやいやいや、ちよつとまっつてくださいな・・・。

「・・・自分の発言の責任は取れよな。」

奴の唇が、わたしのそれにゆっくりとかさなつた・・・。

なんで、私はここにいるんだろう・・・？

「おはよう」

啞然としている私の唇に、軽いキスを落としながら彼はさわやかに微笑んだ。

「トースト、チーズのせる？バターは？」

「・・・両方」

さわやかに微笑む、彼に答えながら、ベッドから降りた。なぜかパジャマは着ている、自分で着た覚えがないということは彼が着せたのだろう。腹立つぐらい、紳士だ・・・いやいや・・・紳士だったらあんな暴挙に出ないだろう！！

「・・・！！！ダメサレテハイケナイ！！！！・・・」

「・・・確かにあおつたのは私だが・・・」

「卵はどうする？目玉？スクランブル？」

「チーズオムレツ！！」

キッチンから、笑い声が聞こえる。むう・・・悔しい、嫌がらせになつてないようだ・・・。

着替えを探すが、見当たらない。たずねるのも悔しいので、パジャマのままキッチンに向かった。

「皿とつて」

言われて、差し出すと、湯気のたったきのこのチーズオムレツが乗った・・・。悔しいほんと嫌がらせをされてるのは私のようだ・・・。

「・・・きのこすきだろう？」

じつと皿をにらみつける私に気づき、彼はいった。

「・・・嫌いじゃない・・・」

悔しいので、そう答えた・・・くそう・・・笑うな・・・なんでそんなにご機嫌なんだろう？

「パジャマ、だいが大きいな？今日必要なものを買に行こうか？
・・・はい？・・・」

「5日もあるしね、着替えもいるだろう？」

・・・もしもしい？・・・

「からだ、きつくないか？初めてだったんだらう？」

・・・言うな・・・思い出させるな・・・あんなのためにとってたんじゃない・・・機会とその気になれなかつただけだ・・・。

「おれは、うれしかったよ、6年我慢した甲斐があった。」

涙目で、にらみつける私の目じりに彼はキスを落とす、まあ怒るなって・・・俺の性別は認識してくれたよな？つてにが笑いしながらささやいた。

・・・いたしましたよ？このなんともいえない場所の違和感と、全身の筋肉痛が、その成果だと思えます・・・。

「食べないとさめるぞ」

悔しい、何でおなかはすくんだらう？

悔しい、何でこのきのこオムレツおいしいんだらう！！

ご飯を食べて、おいしい紅茶をいただいた。

「お腹膨れた？」

彼は、極上の微笑を私に向ける・・・やな予感・・・。

「・・・うん・・・」

「じゃあ、腹ごなしの運動しようか・・・？」

・・・！ちよつとまつたあ！出かけるって話は！？・・・
「だって、おまえ、まだ隙あらば俺から逃げようとおもってる・・・
よね？俺はお前の助言どおりヘタレは卒業したんだ、もう逃がさな
い」
後ずさりしようとしたが、後ろは壁だった。逃げ場をふさがれる。
私の願い、抵抗もむなしく・・・ベッドルームに引きずられていつ
た・・・。

別に、バージンにこだわっているわけではない。
結婚まで清い体で、というこだわりもない。
なのにこの年まで・・・とびっくりされるかもしれない。
そんな、機会がなかったといえばうそになる。

「ゼータイヤだ！行きません」
小さいころからずーっと、となりの12歳年上のいとこの優ちゃん
が大好きだった。

お医者になるんだと、医学生になったその人は本当に毎日忙しそう
だった。
中学に入り、優ちゃんも医師試験に合格し、お医者になったらます
ます忙しくなり、あえない日が続いた・・・。
あまりにもかまってくれない彼に少しすねて、何で美香と遊んでく
れないのと聞くと、自分は不器用だから人の倍努力しないとおいて
いかれるんだよ、と笑っていた。

親たちの間では、なんとなく結婚の約束が出来ていた。もちろん

それは、優ちゃんが親に頼んだことで私が中学2年生の夏に申し込まれた。ロリコンだね・・・とよく笑っていた、でも美香が高校に行つて変な奴に捕まったら、後悔しきれないから・・・。美香のバージンは僕のものだからね、と言っては私にどつかれて、それでも笑つてた。

高校2年の夏休み、珍しく休みが取れたので旅行しようと思われた。もちろん1泊で・・・。

当然のごとく、私は抵抗した。

「ゼツタイやだ」

「なんで？」

「恥ずかしいもん」

「なにが？別に良いじゃないか？いまさらだろう？」

でも恥ずかしいし、怖いものは怖い・・・。それでなくとも、美香のバージンは僕のものだと公言し、会うたびに押し倒されている、なにもないはずはない。

「美香が嫌がることはしないって、約束するから・・・ね？」

うう・・・負けそう・・・。いやいやいや

「でつでもまだ、約束の年じゃないじゃん」

「美香は僕のこと信じてないんだ・・・。」

いやいやいや・・・そういうことではなくって!!

「だめなものはだめっ!!」

何である時、一緒に行かなかつたんだろう・・・。

何で、もっと上手にもう少し待っててつていえなかつたんだろう。

あのときの、優ちゃんの傷ついた笑顔が忘れられない。

そして・・・その知らせは、学校に届いた。

「橘！お母さんが迎えに来てから、すぐ帰れ！」

私は、優ちゃんの申し出を喧嘩別れした形で断りクラブ活動に出ている、

母が何で？教室を出ると、真つ赤な目をしたお母さんが震える声で言った。

「美香、すぐ来て・・・」

・・・怪訝な顔で、母を見たが、詳しいことは教えてくれない。仕方がないのでついていった。いやな予感がした。

母は、私をタクシーに押し込んだ。何で自分で運転しないんだろう？1時間ほどして、救急病院にタクシーが着いた。

母は、痛いぐらいの強さで私の手をつかみ廊下をかけた、病院だし廊下は歩かないと・・・など、妙に覚めた目で私は母を見ていた。

外科病棟の病室の前で母が止まった。

「美香を連れてきました・・・」

ドアが開き、おじさんが出てきた・・・真つ赤な目をして・・・

その向こうに、おばさんが座り込んでいる、なっているようだ・・・

誰かが、ベッドに寝ているようだ、でも、器械と包帯だらけでよく見えない。

お父さんが、私を後ろから抱きしめてくれた。何か言っているがよく聞こえない・・・

優ちゃんがいない、いつも、美香が困ったときには必ず大丈夫だよっていつてくれるのに・・・どこにいるんだろう？おかしいな？こんなときほどそばにいてほしいのに、何してるんだろう？

お父さんが何か言ってる・・・？聞こえないって！！お母さんが何か言ってる？聞こえない！！ゆうちゃんはどこ？優ちゃんはどこ

？ねえ？誰か教えて？意地悪しないで？

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!! いやだ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

周りが真っ白になった。

無免許の飲酒運転だったらしい……。

横断歩道で信号待ちをしていた、優ちゃんに突っ込んで行ったと聞いた……。

何にも悪くないのに……。

お医者さんになりたてのとき、自分の持った患者さんのおばあちゃんに、プロポーズされたけれど、美香がいるからって断ったよってうれしそうに言っていた。

私も、看護婦になるっていたら、じゃあ将来は二人で田舎に行って開業しようね……ってうれしそうに言っていた。

優ちゃんのうそつき……。

美香のバージンどうしてくれるのよ？

美香死ぬまでバージンじゃんか！

責任とつてよ！……！今すぐ帰って来い！！

誰かにゆすられて、目が覚めた……。

あれ……？

「ちよつと、だいじょうぶか？……ごめん、気がついたか？」

覗き込んでいる、心配そうな瞳、コノヒトハダレ？ユウチャントハカオガチガウ……。

私が、怪訝そうな顔で見ていると、奴はあせつた顔で

「・・・本当に大丈夫か？ 俺が誰かわかるか？」

「・・・ええ・・・ええ・・・わかりますも。私が育てていた友情を粉々にした、日置真一・・・。手籠めにしただけではものたりず、軟禁して、おもちゃにしてる。」

「・・・なんかもものすごく、俺にとって不名誉なこと考えてない・・・？」

「・・・事実じゃない！！性別認識だけなら、一回でいいじゃないですか？なんでこんなに何回もいたされているの？ 自分が彼を煽つた事実は棚上げして、彼を睨みつける。」

「ゆうちゃんてダレだ？おまえ、ひとりっこじゃあなかつたけ？」

「・・・言いたくない・・・聞かれたくない・・・もう帰して・・・」

ため息をつきながら、彼は言った。

「まだ、俺の気持ち認識できない？」

「・・・あなたの気持ちじゃなくて、私の気持ちの認識は？」

ゆつくりとこちらを見てしばらく考えて、頭を抱えた後・・・ベツドから降りた奴は服を着ながら、振り向かずと言った。

「・・・わかった、送る。この事は謝る気はないからな？」

そんなことはどうでもいい、私はここから帰りたい。5連休は優ちやんに会いに行くためにとつたんだ・・・。

・・・デモ、ユウチャンハモウイナイ・・・ミカヲ ダキシメテモク
レナイ・・・。

急に私の中で現実が迫ってきた。・・・そうだ、あんなにがんばってバージン守つたのに何でこんなことになちゃったんだロウ・・・。

「ゆうちゃん・・・どうして、みかをおいていつちゃたの？ 美香のバージンなんでこんなヘタレにとられたの？」

泣き崩れる私を、彼は優しく抱きしめながら、・・・ごめん・・・っ

てつぶやいていた。

！！！！やっぱりへたれじゃん！！あやまるぐらいならヤルなっつ！！謝られても、処女膜は再生しないんだよ！！バカヤロウ！！私の心の声が聞こえたのか、己の所業をいまさらのように反省したのか、彼はずっと、私を抱きしめたまま、謝り続けてくれた。そして、その温かい腕の中で、泣き疲れた私はいつの間にか眠っていた。

結局、5連休は、彼のマンションで過ごす羽目になった。

もちろん、3食昼寝付き、セックス抜きだ。

お食事？そんなん私を作るわけないでしょうっ？ここぞとばかりに、こきつかってやりました！。

奴の料理はオムレツ以外も絶品だった。

.....私って.....。

連休が明けて、仕事に出かけた。

おばちゃんに、帰れなかったことをわびたが、電話の向こうで、いいのよ美香ちゃん、でもお嫁に行くときは、おばちゃんにも美香ちゃんから報告してね。・・と言われた。

・・相手もいないのに、どうやって嫁に行けというんだろう。

連休明け、私は勤務につくために病院の廊下を歩いていた。

「おはよう、」

耳元で声がした、心臓が悪い・・。普通に挨拶できないのだろうか・・。

「・・おはようございます、お元気でしたか？」

ずっと一緒だったのに？・・と言うような彼の視線を無視して私は詰め所に向かった。

詰所に入ると、ちーちゃんがいた。夜遅いちーちゃんがこんなに早く詰所にいるのは珍しい。

「ちーちゃんどうしたの？朝から？」

「うーん、それがね・・。」

??深夜勤の看護婦の歯切れが悪い・・？何があっただらう？

横をすり抜けようとした私の手をつかみ、ちーちゃんと言った

「真一さんをとらんでくれるか？」

「・・！！? はいい???・・」

「こないだ、ふるぽーずされとったじゃろ？」

「・・！！! はいい!!???・・」

ゆっくりと、深夜勤務者に目を向けた・・。曰く5日前からずっと私に言いたいことがあるからあわせるの一点張りだったそうだ。

そういえば、主治医だったよな・・・？

その”真一さん”が詰所に入ってきた。ちーちゃんは、その手を握り締めながら言った。

「あんな小娘の、どこがいいんじゃない！」

苦笑いをしながら、奴はこっちを見てのたまうた、

「おれを、男認定していなかったのお前だけだったみたいだな・・・？ いや、雄としては5日前に、体で認識してくれたんだっけ？」

いや~~~~、うそ~~~~ どういうこと~~~~ という黄色い声が、詰所の中に響き渡り、私は、今日なんて仕事なんだろう・・・と軽いため息をつきながら、この騒ぎの原因を作った彼をにらみつけた。

その視線を、彼はスルーして、お部屋に帰りましょうか？、とちーちゃんに微笑を返していた。

だめ！ちーちゃん だまされないで、そいつはヘタレの悪魔よ！
貞操の危機よ！！

私の心の声もむなしく、ちーちゃんは、奴に車椅子を押ししてもらいご機嫌だった。

仲のいい看護婦の都に襟首をつかまれた私は、ため息をつきながら聞いてみた。

「聞かなかったこと、なかったことに出来ない・・・？」

・・・無言・・・

「・・・わかった、主任、詰所内の收拾に、夕飯1回。」

「・・・飲みにして・・・。」

「・・・わかりました・・・。」

襟首を離して、都は周りを見回し、申し送りを始めます！準備はいいの？！ と静かに言った。

一瞬で詰め所の黄色い声は静かになった。・・・さすがだ・・・。
事の顛末を、いつの間にか戻った彼は涼しい顔で入り口で眺めた

後、どこかに去っていった・・・。

あなたが払えよ、！！飲みだい！！！！

騒ぎから2週間、何事もなかったかのような静けさを病棟は、取り戻した・・・。

変わったことと言えばこの2週間、私は彼と必要最低限のことしか喋らず、彼のほうもそうしていたと言うことだ。

明日は、公休日 私は病棟主任である都との約束を果たすためにいつもは行かないこじやれた飲み屋にいた。

「・・・で？ 何があつたの？」
店に入り、オーダーを頼み、日本酒を飲みながら、都がいきなり切り出した。

「・・・もうほとぼり冷めたし、その話はいいじゃん・・・」

「・・・私が押さえてるに決まってるでしょう！？それとも？無責任な噂を放置しましょうか？」

「・・・それは困る・・・非常に困る・・・これでもアタクシはこの職場が気に入っているんだ。」

「・・・夏休みの前の準や勤務の日に、日置先生が差し入れを持ってきてくれたのよ。そのときに、ちーちゃんが詰所において、ちーちゃんと喋ってたら・・・」

「・・・たら？」

「後ろから、好きだ・・・って、・・・言われたらしい・・・」

「
都が めをまん丸にして私を見つめた、そしてあきれたようにため息をつくと言った。」

「・・・何？その不確定 不確定 他人事のような話は？あきれる

わね？」

私は、都の手を思わず握って言った！

「そうでしょう！！ひどいでしょ！！あんまりでしょう！！」

都は、そんな私の手を冷たく振り解き、手酌で日本酒をコップに注いでいた。

「……私が、あきれているのは あ・ん・た！！」

思わず、声を変えて唸る様に吼える……もとい、語る都に慄きながら 恐る恐る聞いてみた。

「……なんで？ 私が悪いの……？」

驚いてる私に、彼女はあきれた顔を隠そうともせず淡々と言い放った。

「……あんだ、本当に分かってなかったの？ 6年前から、日置の態度は回りにばればれだったじゃないの？ 本人もまったく隠してなかったし。まあ、ローテートから帰ってきてさすがに大人になったのか、公私をつけれるようになったとは思ったけれども、それでも丸分かりの態度だったわよ？同期入職の中ではいつまともるかって、かけの対象にまでなっていたのに……本当に？分からなかったの？」

私は、ぷるぷる 首を振った……知らない……知るわけがない……

……ぼかんと口を開けてる私に笑顔で、……ちなみに、胸締め私ね……と追い討ちをかける……。

……友情って……？ 人間不信になりそうだ……

いつの間にか、コップ酒は私の分も用意されていた。明日は休みだったよね、事の顛末の一部始終語ってもらおうよ……？ と言うささやきとともに……。

「んで？ すきだって言われてその後、どうしたの？」

「……べつに……」

「小学生とお話してるのかな……？ワタクシは？ そんなたわごとで許されるとお思い？」

怖い・・・怖いよ都・・・あの何とか、この人・・・どう見ても一筋縄で行かないおじちゃん（教授）達を手玉にとって、病棟をまわしているだけはある。影の番長（師長）だもんね。

一見にこやかに微笑んでいるように見えて有無を言わさないその気迫と、コップ酒の勢いを借りて、私はしぶしぶ白状した・・・。

「最初はね、仕事終わったらラーメン食べに行こうって誘われた・・・」

「都は、3杯目のコップ酒を私に注いでくれた。」

「でも、幻聴が聞こえたでしょう？」

「都が、半眼で私を眺めている・・・怖いって・・・。」

「・・・これはやばいって思って、待ち合わせスルーしようとしたら捕まって・・・。」

「都が首だけで、3杯目を飲めと促した、逆らえない私は指示に従った・・・。」

「飲もうかって彼が言い出して店に行くんだって思ったら、家のみが安いからってマンションに連れて行かれて・・・。」

「都・・・そのガッツポーズは何？今度はあたしが半眼になる・・・。」

「・・・彼の好きな人がなかなか落ちない、自分の気持ちに気づいてもいない、男だとも思われてないどうしたら良いんだって、相談されて・・・。」

「・・・なんていったの？・・・。」

「そんな人は実力行使で男だと言うことを分からせる！！　押し倒せ！って・・・。」

「・・・で、押し倒されたんだ？」

「・・・うん。」

「・・・あの、ヘタレにしてはがんばったよね」

「あ！！都もヤツパリヘタレだと思っよね！！」

本日、初めて私と意見があった都の発言に嬉しくなり私は思わず身を乗り出した。

そんな私の笑顔を無視するように、都は続けた。

「但し、アイツがへたれるのは、あんたに関する事だけだよ。」
「……………へ？」

「あの決断力、実行力、頭の回転の速さ、統率力、あんたも分かっているでしょう？」

「……………うん」

「何で、アイツがマンション買ったか知ってる？」

「彼女と暮らすためだって……………あ……………」

「そうだよ、美香 あんたのためだよ？叶うかどうか分からない思いのために、いつもがんばってる、そんな男だよ？」

「……………そういえば、目的があつて、車にまで資金が回らないって……………」

「ねえ、美香？忘れられない思いがあるって言うのは分かるけれどもいつまでその思い出を引きずっているの？そろそろ前を向いても良いんじゃないの？」

「……………ズキン……………シンゾウガイタイ……………」

「思い出の中の人が、美香を抱きしめてくれるの？守ってくれるの？」

「……………イキガデキナイ……………ヤメテ……………」

「ねえ、美香足元を見てごらんよ。今、あなたのそばにいるのは誰？支えてくれるのはだれ？」

「……………胸を押さえながら、思わず私は聞いた。」

「……………都……………あなたは、どの位に賭けたの？」

下を向いた都が思わず舌打ちをしているのを、私は聞いた……………確かに、聞いた……………」

「帰ってきてから、2ヶ月以内。」

「……………倍率は？」

「……………70……………」

「……………一口……………」

「……………千円……………」

眩暈がする……………いつたい何人が参加しているんだろう？ 観念し

た都を締め上げて参加者の名前を聞く、教授陣の名前まであげられるのを聞いて、・・・頭痛までしてきた。

でも、体だけじゃねえ〜 心もってつてくれないと意味ないじゃん。。。ってボソリと言った、都の言葉に温かい気持ちになった私は甘いのかな？ゴメンね心配かけて・・・。

4杯目の、お酒に手をかけた・・・。

「ごめん！！遅くなった！！！」

「・・・ほんと、帰ろうと思ったよ？」

5杯目で、潰れてしまった美香を横目で指しながら、都は声の主に言った。

「・・・ごめんって、出ようと思つたら、緊急内視鏡の手伝いが欲しいって言われて、活動性で、止血に手間取つたんだ。」

ビールお願いします・・・と注文をしながら、声の主はお絞りで手を拭いた。

・・・さり気無く横に座り、美香？と甘い声でささやきながら、そのささやいた相手のかみの乱れを直してやっている男を都は観察していた。ささやかれた姫はグウスカピーと夢の世界だ。

「ヤツたんだってね・・・？」

ビールを思わず噴出しそうになっている相手を見ながら、都は淡々と続けた。

「ヘタレ返上出来たんだ？」

「・・・それは、どうだろう・・・」

苦笑いをしながら、男はビールを飲み干した。美香が言ったのか？と男は聞いた。

「・・・あほか！ 詰所で自分が言ったことも忘れたの？」

ああ・・・あれね・・・。そんなに、きわどいいい方したっけ？と

平然と返す。

ホントにこの男は、美香に対すること以外だと悔しいほど冷静だ、あれもどうせ他のライバルの牽制にするつもりでわざと言ったに決まっている。

「ちーちゃんがショックで認知症がましになっただてよ？いくつになっても女は恋をしないと駄目だよね？」

「・・・それ、こいつに言い聞かせてくんない？・・・と 自分の隣で撃沈している女に言葉とかけ離れた優しい目を向けながら言った
「・・・あ、じゃあ手にいれたのは、体だけで、心は入ってないって、自覚はあるんだ」

「・・・ほんと、遠慮なしだね、おまえ・・・」

「体も、この調子じゃ一度だけの思い出って可能性もあるわよね」

「」

「いやもう、二桁には載らないとは思っけれど・・・近いと思う・・・」

「あんな、一晩でなんかいしたの？」

鬼畜！！と叫ぶ都に、何で一晩だと思っんだ？と返したら、だって、美香が許すわけないじゃん。と返され反論できずに黙ってしまった。

「・・・一晩じゃないぞ？夜中から夕方にかけてだ。」

「・・・一晩は延べ2日でしよう？夜中から夕方なんて1日じゃない？もつと駄目じゃん」

ああいえば、こついう・・・さすが美香の親友だ・・・たちが悪い。隣で寝ていた美香がもそもそと動いた。

「ううん・・・優ちゃんだあ、美香を迎えに来てくれたの？嬉しい！」

抱きつかれて、思わず固まる・・・？ちょっと待て？だから？優ちやんで誰だ！？

ああ〜確かに雰囲気は似てるかもしれない、でもあつちのほうがへたしてなかつたけれどね・・・。都のあまり嬉しくない台詞を聞

きながら、抱きついてきた美香を思わず抱きしめて抱えなおす。

「こいつ、兄弟いないよな？優ちゃんて誰だ」

「・・・知りたい？」

「・・・」

「・・・美香が、敢えて公言しないことを、私の口から聞きたい？」

「・・・」

「いいよ、教えてあげても？」

「美香に聞くからいいよ。」

都は、にっこり微笑んで。よかつたわ・・・と言った。

「ヘタレ返上のご褒美に、美香のお持ち帰りを許してあげるわ。」

ビールを自分のコップに注ぎながら、都は言った。驚いてる僕をちらりと見ながら、但し美香の気持ちは美香のもだけれどもね・・・
といやな台詞をはく。

判っているよ、スタートラインに立つ権利が手に入ったただけだと言うことは・・・。

いままでは、その権利さえ持っていなかったんだから・・・。

あわてず、確実に、手に入れて見せるよ。・・・ずっと、俺のものにしてみせる。

俺の腕の中ですやすやとねいきをたてる美香の頭のとっぺに口付けを落とした。それを見ていた都が言った。

「続きは場所を変えてください。」

そのままの体制で、僕は都に視線を向けた。そんな僕を見据えて、都は言った。

「・・・別にあなたじゃなくてもいいのよ・・・？美香をしあわせにしてくれる人なら誰でもいいの、今たまたまあなたがいるから頼んでいるだけよ？もし、少しでも美香の意に反することをして、美香を傷つけることがあったなら、覚悟はしておいて・・・ね？」
こちらを見て静かにそれだけ言うと、都はにっこり微笑んで店員に

お愛想とタクシー2台お願いしますと告げた。

くくくんんんあつたかいくくふわふわするくくいいきもちくく

私は、ゆっくりとその感触を味わうとともに薄目を開いた。

大きな腕、温かい広い胸、そして、優しいにおい・・・あれ・・・？

「・・・？優ちゃん？・・・」

「だからそれは誰だ？」

聞きなれた声が頭上からする。都は？ここは？

「・・・俺のマンション、水飲むか？シャワー浴びるか？気分は大丈夫か？」

声の主は、啞然とした目を向ける・・・なんであんたが？何で私はここに？

「・・・酔っ払いをつれて帰れないって都が俺にSOS出したんだ、あいつもかなりよってて、アパートに送っておいたよ。」

それでなんで私は、あんたのマンション？じと目でにらむ私の視線を避けながら、奴は言った。

「都が、お前は飲みすぎたから一晩隣で様子見たほうが良いっていうから・・・仕方ないじゃないか！」

なんか・・・すごい言い訳に聞こえる・・・。にらみ続ける私の視線をかわしつつ彼は言った。

「それとも。ERで点滴したほうがよかつたか？」

「・・・その事態だけは絶対避けたい・・・。」

「ありがとう、でももう大丈夫だから・・・帰るわ」

立ち上がるうとして、ふらついた。おかしい、そんなに飲んでないはずなのに・・・？

ふらつくあたしを抱きしめるように支えて彼は言った。

「泊まっていけよ、お前の嫌がることはしないって約束するよ。それに、この状態で帰したら俺が都に怒られる」

「・・・本当に？・・・ならこの手はなんだあ？」

「・・・だつて、おまえ、離れたらこけるぞ？」

「紅茶が飲みたい・・・」

わかった。と彼は言い私を軽く抱きしめ（られたように感じただけかもしれないが）キツチンへと向かった。

私は、ローテーブルを前にクッションにもたれて座った。ミルクで良いか？と声をかけられて、うん・・・と返事を返す。湯気のたったミルクティーのはいつたカップが置かれた。

「・・・優ちゃんて誰だ？」

「・・・いいたくない、あなたには関係ない・・・」

私の、きつぱりとした拒絶に少し彼は傷ついた顔をした。

「・・・隣に座ったら駄目か？」

「・・・どうぞ・・・」

私の返事に、少し驚いた顔をしてそれでも嬉しそうにこちらへ来る・・・くそう・・・少し心が揺れる。

相変わらず、必要以上に密着してくるやつの身体と少し距離を置こうと身体をよじる。

「・・・お前の身体温かいな」

こちらを覗き込む彼の目と私の目が重なった。温かい・・・？それは、あなたのことだ。

「・・・本当に温かい・・・。生きてる人の温かさだ・・・」

心地よさに身をよじって作った距離が縮まる・・・。

いつの間にか、抱きしめられていた。でも私はこの温かさを離れたくなかった。そして私もこの温かさを抱きしめる。

「ほんと、何もしないから・・・。」

頭のとっぺんに、やさしい振動と、温かい吐息を感じながら、いつ

の間にか私は夢の世界にいた。

「きてたんだ。」

「お風呂沸いてるよ？食事はどうする？」

あれから彼は本当に抱きしめる以上のことをせず私を一晩中暖めてくれた。

そして、その温かさと心地よさに味を占めた私は休みの前日は度々此処に通うようになっていた。

そして、友達以上、恋人未満の、生ぬるい関係が続いている。都のいい加減にしなさいね？と言ったため息とともに。

「おかず何？」

「んん〜ホイル焼きと、味噌汁、又タと冷奴。」

「風呂入ってくる」

もう時刻は日付けが変わろうとしている、ホイル焼きを焼いているとお風呂から声がかかる。

「お前は食べたの？」

食べた、と風呂場に向かって答える、ビール付き合って？ときかれ、だしとくねと答える。

「〜あ〜うまい」

当たり前のように私の隣に座り私を抱きしめるように抱えながら、彼はビールを飲んだ。そして、私の肩に顔をうずめながら、美香のにおい良いにおいとたたまう。

いやいやいや、ちょっと引っ付き過ぎでしょう……。内心突っ込んでみるが、この2ヶ月それ以上手を出さない彼を信用している

私は黙ってされるがままにしていた。

ビールを飲みながらホイール焼きをつつき、彼は言った。

「おまえ、ERの教授と知り合いか？」

首を回し、彼の顔を見ながらいわれた言葉の意味を考える。

「今日、肝破裂の患者のエンボリを頼まれたんだ、そのとき、教授もいてな？・・・お前に手を出すんなら自分の許可を取れと言われた。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「この世で一番大事な娘だから、中途半端な気持ちなら覚悟しろよ、とも言われた。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「縁戚関係でもなかったよな？」

私の顔をちらちらと伺いながら、言葉が続ける。ただの知り合いにしては、真剣に言われたぞ？ちょっとびびったかな？・・・という彼のため息を聞きながら、まだ気にかけていてくれたんだ・・・まだあの人の中でも終わってないんだ・・・と私は身を硬くした。

「？ごめん？なんか気に障ったか？」

私の変化に気がついた奴は、あわてた声で私に言った。

「なんでもない。何もなし。」

質問の答えになっているような、ならないような返事に、彼はそれ以上の質問をせずに黙って食事を再開した。

食事を終えて、飲み足りないのか、私の隣でもう一本ビールのプルタブを引いている彼を私はボーっと見ていた、時刻は2時を過ぎようとしていた。

「まだ、寝ないの？」

ああ、今日は気になることがあったから眠くない・・・こちらを見ずに返事を返す彼の横顔を見ながら、わたしは、言葉を選びつつ話し始めた。

「・・・昔のね・・・知り合いが、榎原教授の下で働いていたの・・・。そのときの何回か、マッキーにはあったことがあるの。私が高校生するときだから、もう、12年になるのかな？昔は、あんなに怖い人でなくて、優しいおじちゃんだったんだよ？」

彼は私の顔をみて眉をしかめながら・・・お前仮にも教授に向かつてマッキーてなんだ？・・・とあきれた声で言った。

「だって、就職してから会ってないし、私の中では、12年前のマッキーの顔しか思い浮かばないもの。私がつけたんだよこのあだ名？かわいいでしょう？」

微笑む私をビールを飲みながら彼は見ていた。私は言葉を続けた。

「12年もたつたんだあれから・・・。私もつすぐ30になっちゃうんだよね。」

お前それはいきなりでしょう？まだ、20台でしょうと彼が苦笑いしながら言った。

「・・・ううん・・・あの時はまだ、16だったんだ。覚悟も何にも出来ていなかったんだもの、どんな言葉が相手を傷つけて、どんな言葉を伝えたら良いかもわかってなかった。だからあんなことになっちゃったんだ・・・。どんなに後悔しても時間は戻らないよ・・・ね？」

お前酔つてんの？と居心地が悪そうに彼が言った。それなら今から謝れば良いじゃないかとも・・・そして、なんなら俺と一緒に言つてやるうか？などとほけたことを言う。

「もう、無理なんだ・・・。謝れないのよ。」

横にいた彼にゆっくりと抱きついた。

「あなたは、温かいよね・・・。とつても・・・。こうしているとほっとする。」

抱きついて、胸に顔を摺り寄せる私を、彼はそっと抱きしめてくれた。そして、ゆっくりと背中をなでてくれていたが、そのうちに、

なぜか身をよじった。・・・あれ？

「・・・・・・・・？ねえ？・・・・・・・・」

「・・・・・・・・言うな・・・・・・・・」

「・・・・・・・・何か、異変が起きてませんか？」

「だから、口に出すなっつて！！！」

真っ赤になっつてうつむいている彼の顔を、私はまじまじと見つめた。

「治まりそう？トイレに行く？疲れているんじゃないの？何でこんなに元気なの？」

「お前には、男の生理を理解して、さり気無く恥らう気遣いはないのか？」

「・・・・・・・・そんなん、6年も看護婦して、28年生きてきた私に求めたつて無理よ？まさか、私に収めるのを手伝ってくれなんていわないわよね？手でも、口でも遠慮させてもらおうよ？」

「・・・・・・・・おまえこないだまで・・・本当にバージンだったんか？・・・」

「あんたが、無理から奪つといてよく言うわね〜〜という台詞から逃げるように、彼はトイレに向かつていった。よしよし、自分で何とかしてください。」

「・・・・・・・・あんたつて、鬼ね・・・・・・・・」

都の冷たい視線を無視しながら、事の顛末を都の部屋で飲みながら私は語った。・・・。

「ホンで、あいつを煽るだけ煽つて拳句、好きな女に擦り寄られて欲情したあいつのぶつを冷静に観察して自分は後始末せずに相手にさせたんだ。」

「・・・なんか、都の言い方ヤダ・・・身もふたもないじゃん・・・」

「その状況を、どう脚色しろと？」

「まるで、私がろくでなし見たいじゃん」

「ろくでなし以外のなんだと言うんだ！！？ 充分ろくでなしだよ？ あんた男心を弄ぶのはいい加減やめろよね？ どうせ、バージンささげた相手じゃない？ いまさらでしよう？ させてやれよ！！」

「だから、身もふたもない言い方やめてって。それに、捧げてない、奪われたんだって！！」

都は、キッツ！！とこちらをにらみつけ言い放った。

「休みの前日にしょっちゅうお泊りに行ってるくせに今更だよ！！あれから、やってなかったなんてびっくりするわ！！あいつのヘタレ具合と忍耐力に拍手喝さいだね！！」

「だから・・・そんな関係じゃないって・・・。」

まだ言うか！！！！ じゃあ、あいつにかまうな！！きっぱり切って捨てる！！ 奴のために！！それが本当のやさしさだ！！！！
「都の剣幕に私は黙り込んだ。そうだ、都の言うとうりだ。わたしは彼の温かさで彼の優しさに甘えて、優ちゃんにあえない寂しさを埋めようとしている。」

「ねえ？美香。」

打って変わってやさしい口調の都の顔を見上げた。

「思い出は捨てる必要はないけれど、思い出はあんたを暖めても抱きしめてもくれないんだよ？ 今一番大切な人は誰か本当はもう分かっているんでしょう？ このままだとあなた、また後悔するよ？」

ひざを抱えて円くなりながら都を見つめた。

「でも・・・やっぱり、わたしは、優ちゃん以外の人のお嫁さんになれない。だって、約束したんだもの。」

私は都の、あきれたようなため息と、ドンだけすり込まれるの？ こんなん置いていってほんまに罪な男だよ・・・というつぶやきを黙って聞いていた。

7 (前書き)

血は出てきませんが、事故の処置のシーンがあります。・・・苦手な方ゴメンナサイ。

私は、夜勤を終えて帰宅の準備をしようと詰所をでた。

「ああ、中野さん悪いけれど帰る途中で良いから、これ急外に返してくれる？」

使うからと取り寄せた器具が不要になったからと師長にことずけられた。ロッカーに行く途中だから良いですよと荷物を受け取りERへむかった。

ERは喧騒の真っ只中だった、

「中野さん！よい所にきてくれたわ手伝って！！！！」

構内を出たところで事故があり、巻き込まれた歩行者が心肺停止状態で運び込まれたらしい、ホットラインは鳴らず、救急隊の独自の判断で搬入してきたので、人手がないとのことだった。

「右側から軽自動車に当たられています。そんなにスピードは出ていなかったようですが、当たるまで運転手は気づいてなかったようです。最初呼吸は浅かったですがありませんが、右の呼吸音が減弱していました、腹部の打撲痕、骨盤の痛みが見られました、そのうち呼吸状態がおかしくなったので補助換気をしたら、急にバックマスの抵抗が出て心肺停止になって。」

若い隊員の説明を聞きながら患者の視診、触診、聴診を続ける奴がいた、

「竹沢、ルートとって、取れなかったら骨髄路で良い。本田、右緊張性気胸の可能性がある緊急脱気しる場所分かるな？右側だぞ。」

婦長さんオペ室に連絡してくれませんか？右側から軽自動車に当てられ、骨盤骨折、腹腔内出血の可能性の患者がいる。カテも同時にするって、止血がいるって、腹部外科と整形にも同様に伝えてください。念のために胸部外科にも声かけて必要だったら呼ぶって言つと

いてください、血型調べて血を手配して下さい、本田脱気出来たか？出来たらオペ室に移動。」

次々と指示を出しながら、研修医の手元を見ながら処置を一緒におこなっていた、でも、私は、処置台に乗せられたその若い男の人と12年前の思い出が重なって足がすくんで動けなかった。

そんな私を見て奴が叫んだ、

「中野！ガウンつけて手伝って」

でも私は動けなかった。

「美香！！お前の職業はなんだ！！」

こちらを、まっすぐな瞳で見ている奴を見つけて、私はわれに帰った。

「そうかん準備します。」

頼む、と奴に肩をたたかれ、私は救急カートに向かった。

処置に反応し、患者はオペ室へ向かった、時計を見たら、まだ此処についてから30分もたっていないかった。もつと過ぎていると思っただのに。

「助かったよありがとう。」

こちらに、笑顔を向けながら奴が向かってきた、その笑顔をポーと見ながら私の回りは、暗くなっていた。

「・・・美香・・・」

ダレカガヨンデイル

「美香」

心配そうに覗き込んでいる奴がいた、ありがとう助かった、お前本当に外傷嫌いだね、巻き込んで悪かったな？ 彼に本当に済まな

さそうに謝られた。当直室のベッドに寝かされていた。

「あの人・・・どうなったの？」

「今のところ助かると思う、処置が早かったし。」

でもいきなり搬入は勘弁して欲しいよな？と彼は頭の後ろで腕を組みながら言った。そしてこちらに視線を向けていった。

「槇原教授にしかられた。」

「・・・？」

「内科しか経験のない部外者に無理やり手伝わせて、患者増やすな・
って」

私は、ベッドの上に取り上がりひざを抱えて笑った。

「他に何か言われた？」

ううん・・・まあ・・・と歯切れの悪い返事を返した後、彼は 私の顔を覗き込みながら言った。今日来るか・・・？と 無理にとは言わないけれども・・・とも言った。

「ワイン ロゼ冷えてる？」

こちらを見てにっこり笑って、かって帰れば良しさ、僕が帰るまで仮眠してて？テイクアウトのイタリアンで良いか？ときかれて、私はうなずいた。

彼のマンションで、テイクアウトの夕食を食べながらワインを飲んだ。

「隣に座らないの？」

私が聞くと苦笑いしながら彼は、この前のことがあるから今日はやめとくと神妙な顔で返す。気にしてたんだ？と私が笑うと、当たり前だろう・・・と真っ赤になって、向こうを向いた。

そんな彼の横顔を見ながら私はゆっくりとはなしはじめた。

「産まれたときからそばにいてくれたんだ。」

「・・・え？と彼がこちらを見た。」

「隣の、12歳年上のいとこのお兄ちゃん。中学2年の夏にプロポーズされて、高校卒業したら結婚する約束をしたの。でも結局、事情があつて、16の誕生日に籍は入れたの。中野は彼の名前。私の旧姓は橘。」

「・・・なんだそれ？ロリコン？下を向きながらボソリと彼が言った。うん、自分でもロリコンだねって言つた。でも、美香がもし他の奴に取られたら悔しいから早い目にマーキングするんだって言つた。」

「優ちゃんはね、マッキーの下で働いてたんだ。だから、榎原先生とは何度もあつてる。結婚式にも来てもらう約束していた。」

「・・・彼は、下を向いたまま黙つて聞いていた。」

「籍は入れたけれど、卒業までは何もしなかつて約束だったのに、その夏に、旅行に誘われたの。けれど怖くていけなかつたの。何もしなかつて言つたけれど信じられなくて・・・最後に喧嘩別れしたの。」

「・・・彼は下を向いて無言で聞いていた。」

「彼が一人で出かけたその日、クラブ活動していたら、お母さんが来て・・・」

両手を握り締めた、

「救急医してたのにね、自分が事故で死ぬなんて思つてなかつたろうね。」

声が震える・・・涙が止まらない・・・。

「もういい」

いつの間にか隣に来た奴に息が止まるほど強く抱きしめられた。

「俺はそばにいる、どこにも行かない、俺じゃ替わりになれないか？」

アナタハオニチャントハツガウ、ミカヲアタタメテクレル・・・

アナタハアタタカイ・・・。

「・・・温かいね」

私の独り言で彼の腕にますます力が入るのを感じていた。抱きしめられたまま時間がゆっくり流れていった。

「・・・いいか？」

かすれた声で彼が聞いてきた。私は顔を上げずにうなずいた。

温かさに、ゆっくりと彼の重みが加わっていくのを、全身で感じていた。

8 (前書き)

医療関係の話が続きます。

一つの考え方・・・と思って読んでいただけると、ありがたいです。
だいが、シリアス・・・長いです。

最近、彼の勤務時間は殺人的である。

ERの榎原教授に目をつけられたこともあり、何かとってはお呼び出しを受けており多分殆んど寝ていないのではないだろうかとも思う。

だからといって担当の入院患者が減らされるわけでもなく、本当に出来る人ほど仕事が増えてしまうこの体制はぜひ改善すべきだと、一人憤慨していた。

日勤終了の、5時過ぎにやっと彼は病棟に顔を出した。今日新入院を持ったはずなのに、診察は出来ず、ルーティーンの指示のみ電子カルテで出していた。

「山下さんの息子さんが先生はまだかつて……」

入ってきたばかりの彼に、若い看護婦がいいにくそうに言った。今日の入院患者の息子だ。もう、98になる母親に、少々マザコン気味のきらいがあるというか……寿命……ってなんだったろうという勢いで、延命にこだわる。

「ムンテラするから呼んでくれるかな？」

判ってるよありがとう、と言わんがばかりの笑顔に向けてやさしく微笑む。くうう……その笑顔私にもくれっ！！最近まともに会話してない……。

やがて、山下さんのご息が詰所に入ってきた。彼は向き合って、病状説明を始めた。

「肺炎を起こしてます。レントゲン像から誤嚥性だろうと推察されます。食事は胃に直接入れたチューブから取られているので、肺炎の原因は、ご自身の唾液を飲み込むことが出来ずに、肺のほうに流れてしまったのが原因かと考えられます。ご高齢なこと、栄養状態のこと肺炎の原因を考えると非常に厳しい状態ではないかとおもわれます」

息子は、はんかちを握り締めていった。

「入院期間はどの位になりそうでしょうか？」

彼は、それはいつ退院できるかと言う事ですか？と聞きなおす。

「これ以上認知が進まないように、なるべく早くつれて帰りたいんです」

彼は、ゆっくりと息子に告げた。

「非常に残念ですが、予断を許されない状態です。いつ何時急変されてもおかしくはありません。合わせたい方があるなら早い目に連絡してください。」

息子は、目を見開いていった。

「それは、入院期間が長くなるということですか？」

彼は、息子の目を見て静かに言った。

「残念ですが、お母さんは非常に高齢で、現在の医学ではこれ以上の治療は難しいということです。たとえば機械で延命を凶つたとしても、機械から離脱するのは非常に難しいと思われます。そのためにかえって、しんどい時間を長引かせるだけになる可能性も有りません。」

息子は椅子から立ち上がり叫んだ！

「やめてくれよ先生！あんたたちが見放したら俺たち素人はどうしたらいいんだ？無責任じゃないか！何とかするのがあんたの仕事だろっ？」

「残念ですが、僕の知っている限り、お母さんに施せる治療は非常に限られ、また殆んど効果のないものばかりです。そして僕の見限り僕が感じるのは、お母さんに必要なのは延命治療ではなく横に座った家族の温かいぬくもりを感じることにとおもいます。」

息子は、まったく奴の話の聞かず、母は女でひとつでしてくれただこと、苦労ばかりかけてまだまだ長生きして欲しいこと、目見放すようなことはして欲しくないこと……。どんな姿になっても行き続けて欲しい事・・・を延々と喋りつづけていた。そしてそれを彼は黙って聞いていた。

「・・・あ・・・来てたんだ」

「食べるものだけ作るところと思って」

日勤を済ませて、食料を冷蔵庫にストックしようとした彼のマンションをたずねていた私は、思わぬ早い帰宅にびっくりとした。

「早いね、まだ8時だよ？」

「風呂と着替えに帰ってきた。おまえこそ明日日勤じゃあなかったけ？めずらしいな、やすみじゃないのに」

「疲れているだろう恋人の体調を心配して、食事を作りに来ちゃだめ？」

ちよつとびっくりした顔をしたその後、夕方詰所で見た笑顔を3倍にした極上の笑顔を私に向けて、私のほうに手を伸ばしながら、ありがとう嬉しいよ。といった。

お風呂に入った後に夕食を食べさせて、夕食のかたづけをしながらリビングを見るとクッションにもたれて、うとうとしている彼がいた。

「寝るんだつたら、ベッドに行ったら？」

「いや、山下さんが気になるし、病院に戻る」

私は顔をしかめた。

「老衰につける薬はないっていつてやればいいのに！！」

「それは、俺たちの考え。患者家族の思いとは別もんだろう？」

おまえそれ患者にいうなよ？と苦笑いしながら彼は言った。

くうくそれは分かってるって、でもこのままだとあなたのほうが倒れちゃうよ？という私の訴えが心に響いたのか、それとも本当に疲れたのか、彼は当直医に電話をして今日は疲れたのでもう行かない状態が変わったら何時でも電話して欲しいと伝えていた。

そして、そのまま本当にすぐに寝てしまった彼の寝顔を見ながら、私も眠りについた。

詰所の中に罵声が響いていた。

「何で今日明日なんて言いかたしながらおまえがいないんだよ！！」

罵声の主は山下さんの息子。そして怒鳴られているのは彼だった。入り口で唾然としている私にきずいた都は私の手を引き、詰所内の休憩室に連れ込んだ。

「何があったの？」

「昨日の23時に山下さんが急変して、息子はちょうど自分の荷物を取りに病室にいらなくなって、夜勤者は日置呼ぼうとしたんだけど、当直医が岡ちゃんんで、呼ぶな必要ない俺が責任とるって言って、結局奴は挿管も出来ずこの騒ぎ」
それって……」

「……レスピ希望したんだ」

「うーん、日置は乗り気じゃなかったから、もう一度よく考えてくださいって保留にしてて、岡ちゃんは年齢とプロフィールみて必要なって家族と話もせず決め付けて、もっともアイツは挿管経験少ないし失敗して、ますます挿管困難になって……」

「それで主治医に連絡もせず？岡ちゃんてアイツの上だっけ？」

「そうそう、まったく使えない8年目、ローテート先からも早々に放りだされてたからね。役に立たなくても先輩ってのが辛いわよね」

「怒鳴り声はまだ聞こえていた。患者の権利と人権について叫んでいる。何をふざけたことを言っているんだろう？じゃああなたは医者に過労死しろと言うのか？手のひらに余る命を救うために彼がどんなにがんばっているのか見ていないからそんなことがいえるんだ。私はこみ上げる怒りに震えていた。止める都を押し切って、反論するために詰所に出ようとしたそのとき。」

「あんた、寿命って知っているか？」

ちーちゃんだった、そういえば前回入院のとき、山下さんと病室が一緒だった。

「あんたのエゴで生かされてたあんたのお母さんが本当にあんたが希望するように、生きるってことにこだわっていたと思うのか？」

ちーちゃんが山下さんに諭しているのが聞こえた。

「口から食べられず、管を無理やり胃に通されて栄養を取って生かされているそんな生活をあんたのお母さんは自分からして欲しいって言っていたのか？」

「あんたが、やさしいこだって言うのは知っているよ。だって見たたからね。」

ちいちゃんは静かに続けた、

「でも、もし私なら子供のエゴで生かされるなんて真つ平ごめんだね。あんたは、ほんとうにあんたのお母さんが延命を望んでたと思っ言っているのかね。」

山下さんは黙ってちいちゃんのことを聞いていた。そしてしばらく考えた後、彼に向かってお世話になりました。失礼しました。・・・
と行って去っていった。

山下さんの息子が帰った後、都はちいちゃんの手を握って、ありがとうって言っていた。ちいちゃんは、にっこり微笑んで、真のほうを向いて

「どうじゃ？ぐらつと来たかの？あんたに対する愛情ならあの小娘に負けんぞ？今からでも遅くないと思うがの？」

うなだれながら椅子に座っていた彼は啞然とした顔をちいちゃんに

向けていたが、いきなり笑い出した。

「ものすごく来ましたよ。ありがとうございます。」

彼の言葉に満足そうな笑みを浮かべて、ちいちゃんは休憩室の入り口にいる私をみてふふんと鼻で笑った。

私は、その日彼のマンションで、彼の帰りを待った。

「……きてたんだ。」

おかえりなさい・・・と、微笑んだ私に、複雑そうな笑顔を返して彼は言った。

「……今日は、独りになりたいんだけれども？」

夕食をテーブルに並べる私を見ながら、彼は重ねて言った。

「まあ、たべたら？さめちやうわよ？」

彼の言葉を無視した形の私の発言に、ため息をつきながら彼は腰掛けた。手を合わせて食事を始めた彼に私は声をかけた。

「……ビールだそうか？」

こちらを見ようとせず、いらぬ……と答える。

食事を終えた彼の隣に私は腰掛けた。彼は身をよじり少しずつ距離を置こうとする。

「……きてるね？」

「……そうだな」

「あなたが悪いわけじゃないでしょう？神様の領分じゃないの？」

ゆっくりと、こちらを見据えて、再び下を向いて彼は言った。

「……疲れてたからって、家族が納得できるまで話し合いをせずに放り出していたのは、俺の責任だ。ちーちゃんが助けてくれなければ、まだ山下さんは納得できなかったかもしれない、レスピに乗せてたとえ離脱できなかったとしても、山下さんの息子さん自身にそれを見せて、ご自身で考えてもらうのもひとつの方法だったと思うんだ。でも、結局あのと疲れていたことをいい訳にしてそれを

提案しなかったのは、俺の問題だ」

「……あの、マザコン男がそれでも納得しなかったら？」

「それは、言い逃れの推論だ。俺が、山下さんの息子さんがうけいられるように、全力を尽くさなかったことに変わりがない。」

「……それを、あなたにかかわる人全員にあなたがしていたら、あなたつぶれちゃうよ？」

分かっているよ、力量不足だってことは……頼むからほっといてくれないか？……と彼は自分のひざに顔をうずめながら言った。

むうう……。聞いていてむかむか怒鳴りたくなった私がいた。完全主義のヘタレっつ！？自分のキャパシティ以上のことを自分に求めるなっつ！……。イカンイカン、ここでこんな事を叫び、けんかしたら、彼にますます追い討ちをかけてしまふ。今日は彼の言う通り帰った方が良くかもしれない。

食べ終わった食器類をかたずけて、風呂に入れるよう準備した。荷物をまとめて、おいとまする旨を伝えようと彼のほうを見た。

……。小さくうずくまり、一人で自分を抱きしめている彼の姿が見えた。……

？ワタシハナニヲシテルンダロウ……。ワタシハナニモノナンダロウ……。？

甘えたいときだけ彼を利用している私。

激務の中でも、患者や家族と向き合いすべてを受け止めようと努力し、自分が取りこぼした思いを、自分がふがないせいだと、自分をせめて打ちひしがれている彼。

彼の何を見ているんだろう。

彼のこんな時に自分を責めるばかりで回りの助けを求めようとする
い不器用なプライドを尊重し一人にして良いんだろうか？
わたしは、彼のそばにひざまずいていった。

「・・・帰るよ？・・・本当に帰っていいの？」

顔も上げずに彼が、ああ・・・と言った。

私は、彼を包み込むように抱きしめた。

「なに、がんばっているの？あなたのヘタレ具合は、しっかりばれ
ているよ？私は貴方の弱い部分も、へたれた部分もすべて好きだよ。」

「

彼は、やっと顔を上げてこちらを見た。なんだ？お前からのいわれ
具合だと、俺って救い様なさそうだな？と、笑った。

そうだよ？知らなかった？私は知ってたけれどね。でもそんなあな
たもすきなんだよ、私の台詞にゆっくりと唇を重ねてきた。

「でも本当に、今日は帰って。お前がそばにいたらお前を抱いてし
まう。でもこんな気持ちでお前に触れたくないんだ。」

「私は、今日はあなたを抱きしめて寝たい。それ以上のことはさせ
ない自信はある。いちや駄目？」

お前の守りは鉄壁だもんな。・・・と笑いながら風呂に入ってくる。
と彼は言った。

そして、彼は私の腕の中で私に抱きしめられながら眠りについた。

山下さんの息子さんからお礼の手紙とお礼のお菓子が詰所に届いて
いた。ちいちゃんにも面会して頭を下げていたらしい。

ちいちゃんの言葉も有ったとは思うが、私は、彼の思いも伝わっ
ていたとも思いたい。

「10年たつたらもつとキャパ広がってるだろうね。」と私が言う
と。

「10年たったら違うイベントが発生してるだろうね」と、あいつ。
お菓子をつまみながら、彼は淡々と返してきた。何であなたが、看護婦休憩室でお茶してるんだ？こら、勝手にカップ出すな、コーヒ
ーいれるな！

紅茶はないのか？と勝手に棚を物色している彼の後姿を見ながら、
心の中で突っ込んでみた。

「その時イベントに負けてへタレない根性を身につけて頂戴」

私の台詞に彼はにっこり微笑み、

「そのときはまた一晩中抱きしめて慰めてもらうから良いよ」
と、のたもつた。ここは職場じゃ！！しかも休憩室じゃ！！真
っ赤になって口をパクパクさせてる私を無視して、入り口から入っ
てきたスタッフに、すみませんお茶いただいています。と 涼やかな
貴公子のえがをを振りまいていた。

しょうがない、何時でも抱きしめてあげるよ……。

その事件の後から、休みの前日だけでなく時間を作っては彼のマン
ションに通うようになった。

めんどくさいからここに荷物を移したら？ という彼の提案に、
でもすぐにはうなずけない私もいた。黙っていると、なんともいえ
ない顔で無理には言わないよ・・・とかえされて胸が疼いた。何
で思い切れないんだろう、優ちゃんの笑顔が浮かぶ……。

……………ゴメンナサイ……………。

世間はいわゆるクリスマスと言うイベントにさしかかろうとしていた。

世間一般の常識？にはずれることなく、クリスマスプレゼントをリサーチしてくる彼をのりくらりとかわしながら（だって、宝飾店に誘うんだよ？いい機会だからとかいいながら・・・。）私は日々の生活に追われていた。

休みをあわせて、珍しく外で映画を見る約束をした。甘あまの恋愛ストーリーを希望する彼の提案を却下し、アクションホラーを指す。開演まで時間があるので、隣の店を覗こうと連れて行かれた先は、いわゆるジュエリーショップだった。

「・・・何しに行くの？」

「クリスマスプレゼント、この間雑誌見ておまえが欲しいって言ってたネックレスがこの店においてあるんだって。」

「・・・なんで、宝飾品の売り場の品揃えをこいつが知ってるんだ？しかも人の行動をよく見てるよね？怪訝そうな顔をしている私に、彼は、

「実物見て、気に入らなければやめればいいし、見るだけならいいだろう？」

彼の言葉に、もっともだと思い直し、あのネックレスの値段を思い出しながら促されて店に入る。

店の中は、クリスマスの飾り付けで華やいでいた。

「いらっしやいませ」

笑顔の店員に向かって、彼はネックレスの特徴を伝え案内を頼む。につきり微笑んだ店員が、私と奴を促すように奥に設けられたクリ

スマス用の特設コーナーに案内する。

「ご希望のものはこちらにあると思うんですが。」

店員に促されて、ショーケースを見ると、あった。あの時雑誌に載っていたネックレスだ。でも、名のとうったブランド物のそれは値段もそれなりだった。

「どう?」

いつの間にか、隣にたつて肩を抱いてきた彼の顔をみながら、私は、ためらいがちに口を開いた。

「どうって・・・素敵だとは思っけれども・・・ねえ・・・」

私のためらいをきずいてないのか、無視しているのか、試着可能ですか?と彼は店員に言った。・・・いやいや、そんな簡単に着けさせてくださいって言う値段じゃないし・・・。

店員はそんな私をまったく無視して、彼にネックレスを渡す。彼は私の後ろに回りこみ強引にネックレスを止めた。前に回り私を見て満足そうに言った。

「よく似合ってる、これでいいか?」

いやいやいや、お兄さん値段ちゃんと見てますか?桁見間違えてませんか?

たじろいでいる私に苦笑しながら、店員にプレゼント用でとっている彼がいる。!!!だから!!!桁を見間違えてませんか!!!

そんな私をまったく見ずに店員はここぞとばかりに彼にセールトークを繰り返す。

「実はクリスマス限定で同メーカーから、ネックレスに合わせたリングもございました。」

「へっ???リング?」

「石はダイヤモンドでクオリティももちろん絶対の自信を持ってお勧めできます。単体でエンゲージとしてお買い求めになれる方もいらっしやるんですよ。」

興味深そうに奴は耳を傾ける。現物はあるの?と言う彼の声に(や

めてくれ！！！！）私は逃げ腰になる。

「こちらになります」

逃げようとした私の手をつかみ、彼は引つ張った。店員の出してきたリングを仕方なく見る。うとう、ほんとかわいい、私好みだ。でもエンゲージ？

「サイズ調べられますか？」

いやいやいや、いらぬし、しないし、やめて頂戴。彼の台詞に首を振って抵抗して見せたが、俺に恥をかかせるのか？という無言の圧力に屈する。

「まあ、よくお似合いですわ」

いや、やめて頂戴、これを受け取る心の準備が私にはまだない。

泣きそうになつてる私の顔を見て、彼はため息をつきながら店員に今日はやめときますと言った。取りおきいたしましょうか？と言う店員に貴公子の笑顔を向けながら近いうちに来ますから良いです。と返していた。

ほっとし脱力中の私に彼はため息をつきながら言った。映画始まるよ、行こうか・・・。と

衝撃的なイベントのせいで映画の内容は殆んど覚えてない。夕食どうする？ときいてきた彼の言葉に答えあぐねていると、彼の携帯が鳴った。

「・・・はい、はい、レントゲンとって当直医に診察してもらってください出来れば血液ガスと一般採血も出しておいってください。僕もそちらに向かいます。」

彼は患者さんの血中酸素飽和度が上がらないらしいちょっと病棟に顔を出す夕食はこの次にねといいながら私を軽く引き寄せてほほに唇を寄せる。いやいや公衆の面前だしここ！！思わず身を硬くする私に笑って、じゃあなまっすぐ帰れよと言った。

小走りで横断歩道を渡りひとこみにまぎれていく彼の後姿を私はそ

の背中が見えなくなるまでずっと見送っていた

……ゴメンナサイ……。

「それで、私になんと欲しいのかな？」

一人の部屋にかえるのがいやで、都の部屋を訪れた私はことの顛末を都に相談していた。

「……どうしたら良いんだろう？」

「……!! あほかっ!! 都の罵声が部屋に響き渡る。ここは野中の一軒家じゃないんだから、もう少し小さな声で……。そんな私の心の声が聞こえたのか、こちらをにらみつけながら低い声で都は言った。

「あのな、20、21、の小娘が”いや〜ん 彼に意味深なこと言われちゃった〜ん”てのと訳が違うんだよ!! 成人女性のクリスマスなんか、高値になるのはその当日まで!! 年末大売出し中のあんたが、買ってくれる奇特な人をここで見逃したらどうするの？ 我々には、新春大売出しは当てはまらないんだよ!! あんたの後ろはがけっぶちなのだ!! 本当にわかっているの？ いいやつ!! いったそのことこのまま腐ってしまえっつ!!」

「……そこまで言わなくても良いじゃない、と心の中でつぶやきつつ、目をそらしながら都に反論する。

「歳末大売出し中なのはあんたも一緒じゃないの……。？」
「きつと、こちらをにらみつける都におびえて小さくなる。」

「歳末じゃない!! 年末!! 私は今は結婚する気がないからいいの!!」
「……」
分かったような分からないようなどっちでも良いようなよくないような、訳の分からない都の怒りに、私が悪うございましたと謝ってみる。

「ほんとに?! ほんとに悪いと思ってる?! なら! 奴に今すぐ電話して指輪が欲しいと言ってみる!!」
「いやいや、その話 論点ちよつとずれてるし……。」

「ずれてない！！でなかったら、奴が次に行けるように切ってますっ！！男は30からだって言うけれど、アイツは32じゃないか！！足掛け7年も振り回せば充分でしょう？！」

「でも付き合ってたまだ半年だし……。」

「阿呆！！だから、自分が歳末大売出し中の身分だつて言う事忘れるな！！時間は止まってくれないんだこうしてる間にも刻々と過ぎていくんだつっ！！ぐずぐず言ってる場合じゃないって！！！」

「……年末じゃなかったの？やっぱどっちでもいいんじゃない……。」
「うるさいわ！！！」

何で私の心の声が都には聞こえるんだろうという、私の驚いた顔に都は、あなたの考えなんて顔を見たらただ漏れ出し……、とため息をついた。

「……別れることは、考えてないんでしょう？」

都の言葉に私は返事が出来なかった。でも、このままじゃいけないことも分かっていた。

「はじめは……、つけないとね。」

都は、びっくりした目で私を見つめ、そしてため息をつきながら首を振った。

そして、その後私たちの間でそのことに対するそれ以上の会話は無かった。

翌日、都が会議から詰所に戻ると、ヘタレの友人の、ヘタレの彼氏が、ヘタレながら電子カルテに所見を打ち込んでいた。他に人影は無い、音を立てずにそつと後ろに立ち首に両手をかけた。びくつと肩が動き恐る恐る後ろを振り向く彼を見ていた。

「……おまえ、それ、何の合図だ？」

横に腰掛けて周りを見回しながら、あなたに心情を表してみました。と都は笑いながら言った。そして続けた。

「聞いて欲しいことがあるなら夕食で手を打つわよ？」

「・・・ああ、とカルテを見ながら彼は答える。

「昨日の今日で情報早いな？」

「だってテレパシーでつながってるもん。という都の台詞をスルーして彼は、30分後西口駐車場と答える。

「いや！正面玄関に迎えに来て。・・・という都の台詞に、お前どの女王様だよ？　じゃあ40分後正面など、キーボードを叩きながら返す。

詰所の入り口から美香が車椅子のちいちゃんを連れて入ってきた。美香は今日は準深夜だ、それを見ながら都は少しあんたのへたれた彼氏借りるねと心の中でつぶやいた。

「うわ〜懐かしい車。まだこんなのに乗ってたんだ!!」

ぼろぼろの緑の軽自動車を見て都が声を上げた。

「・・・車まで手が回らなかったんだよ・・・。」

新婚用のマンション買ったものね？と都が茶化すように言った。

「・・・それに、買い換えるにしても、普通車にするか、ワンボックスにするか、悩んでいたし・・・。」

「・・・だって家族が増えたら必要な仕様が代わるだろう？　と続いた彼の台詞に、あんたって本当にけなげね。と都がつぶやいた。それなのに、あの年末大売出しは・・・。とボソリ。

「指輪は婚約指輪のつもりだったの？それとも単なるプレゼント？」

「・・・この年で、あの年で、いまさらだろう？」

という彼の答えに、そうでしょうね・・・と都がつぶやく。

「まさか・・・解ってないわけじゃないよな？あいつ・・・？」

い〜え、いやというほど理解してましたよ・・・との都の答えに、それはそれで、へこむよな・・・とかれは答える。

「16年たす12年」

「・・・？」

あの子は16年優しいお兄ちゃんに”大事な大好きな美香”をすり込まれ、死んだ後も幻を見せられ続けたの。」

「・・・それに対して、ただか半年の俺は分が悪すぎるってか？そうはいってないけれど・・・でもあの強力なすり込みは手ごわいと思うわよ・・・とやなことを言う。」

「美香は、優ちゃんごとくで美香なのよね」
意味がわからず、顔をしかめた。

「美香は美香だろう？亡霊が何を出来るんだ？」

あきれた顔で、都は俺の顔を見た。

「患者さんに対しては、気持ちを汲むのが上手なのに、当事者になると全然ね・・・それとも、嫉妬に目がくらんで目の前で何が起きているかも見えなくなってるの？」

俺はいらいらしながら返した。

「何の事だ？」

都は淡々と続けた。あんたのキャパシティの広さに期待するわ・・・と。

「はじめをつけたいっていつてたわ」

「それは？・・・何に対して・・・？、誰に対してだ？」

さあ・・・それが分からないから困ってるのよね・・・と都は言った。

・・・ほんとに分が悪い、亡霊とどうやって張り合えというんだろ
うか・・・。

もうすぐ新しい年が来ようとしているのに、彼女と俺の時間はまた動かなくなつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9803z/>

斜め35度右後方からその声はした。

2012年1月1日00時50分発行